



第12回

建もの旅日記

憧れのスペインへの旅

財団法人日本建築家協会 沖縄支部 幹事
伊良波 朝義 高橋空間設計工房

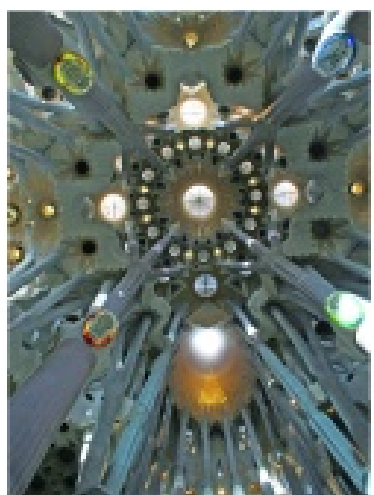


誕生の門側ファサード

オラー(こん)にちは、
昨年11月下旬に建築士仲間10数名で憧れのスペインを旅してきた。首都マドリードを皮切りに、古都トレドやアンタルシア

地方のゴルドバ、フランクで有名なグラナダ、スペイン第3の都市バルセロナなどの世界遺産を中心に巡り、旅の最大の目的地であるカタルーニャ地方のバルセロナへ。バルセロナには、ガウディが手がけた建物が数多くあり、グエル公園やカサ・ミラ、カサ・パトリヨ、グエル邸、カサ・ピセンスなど6件が世界遺産に登録されている。ガウディが生涯を捧げ

ガウディ建築が伝えたいこと



聖堂見上げ(穏やかな自然光が降り注ぐ)

今なお未完の聖堂サグラダ・ファミリアは、この旅のクライマックスに相応しく、偶然にも20日前にローマ法王ベネディクト16世によって正式に教会と認定する聖別のミサが執り行われた直後であった。1882年に着工したが、聖堂内部が完成していなかったため、これまで教会として認定されていなかった。高鳴る感動を抑えつつ、3つの門のうちガウディが存命中に唯一完成した「誕生の門」から入場することに。内部は、樹木のような柱が林立し、森の中にあるような空間に圧倒され、上部に近づくと柱が枝に分かれ、柱が自ら成長していくような表情に感動した。また、色鮮やかなステンドグラスは、白で統一された内部に彩りを添え、刻々と変化する様は、まるで生き物のようにも見える。伸びやかで、穏やかで、かつダイナミックなスケールに、これまで体験したことのない、建築の意匠、精神性を感じた。現在も約17、000㎡の敷地内では、ガウディが残した設計図や模型を元に建設が続けられているが、入館料やグッズ販売、寄付金などにより建設が急ピッチで進められ、完成まで200年は掛かると言われた計画も、50年程短縮されるといいます。ガウディが携わった時代の建築と現在建設中の建築ではおもむきが明らかに違っている。経済原理にとらわれず、じっくりと時間をかけ、いつまでもバルセロナのシンボルとして人々に感動を与え続けて欲しいと思うのは私だけだろうか。

(※掲載写真は著者提供)